

部 長 舟 橋 孝 司
研 究 主 任 橋 本 翼 (中学校)
研究副主任 滝 藤 充 宏 (小学校)
部 員 数 5 5 名

『小学校』

1 研究主題

一人ひとりの力を伸ばす体育学習
～体づくり運動について～

2 はじめに

昨年度から、体づくり運動に焦点を当て、新学習指導要領でのねらいや内容を理解し、実践に生かすことを研究の狙いに設定してきた。昨年度は、部員が1人1つずつ体づくり運動を紹介して、教師役と児童役に分かれて体験したり、11月には講師に招き、体づくり運動の講習会を行ったりするなどして理解を深めた。

そういった研修を経て学んだことを生かし、今年度は体づくり運動で「体を動かす楽しさや心地よさ」を感じさせるための授業展開について、各校で実践をして検証していくこととした。

3 研究経過

4月に研究テーマの確認を行い、仮説・実践方法について検討を重ねた。仮説については小牧市で進めている小グループでの学び合いを取り入れ、「体づくり運動は、小グループ(3～4人)でかかわり合う活動を行うことで、体を動かす楽しさや心地よさを味わい運動好きになることができる」とした。10～11月に各校で実践を行い、事前・事後アンケートの集計と、児童の書いたふり返し用紙を回収し、検証を行った。

4 研究の概要

(1) 仮説の決定

改訂された学習指導要領に基づき、育成を目指す資質・能力の三つの柱のいずれか一つに焦点を当てる方向で話し合いを進めた。そして体づくり運動は、体を動かす楽しさや心地よさを味わい運動好きになることを目指す運動であることをふまえ、「学びに向かう力・人間性等」(どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)に焦点を当てることにし、仮説を「体づくり運動は、小グループ(3～4人)でかかわり合う活動を行うことで、体を動かす楽しさや心地よさを味わい運動好きになることができる。」に設定した。

(2) 授業実践について

各校で実践を行うに当たり、実践方法を協議した。そして以下の前提条件と実践の流れを決定した。授業デザインは小委員で高・中・低学年それぞれに4時間分の案を作成し、事前に研修を行った。また必要なアンケート、ふり返し用紙についても配布し、データを収集した。

【前提条件】

- ・ 単元として扱う。(授業の帯で行わない。)
- ・ 小グループ(3～4人)で行う。(一人で行うような体づくり運動も、グループで関わり合って行わせる。)
- ・ 内容は授業デザインに従って行う。

【実践の流れ】

- ① 事前アンケート
- ② 授業実践(4時間)
- ③ 事後アンケート

5 今後の課題

まだ検証の途中ではあるものの、事後アンケートからは、「楽しかった」という意見が多く見られた。またグループでの活動に楽しさを感じた児童も多く、体づくり運動の持つ楽しさと、小グループでの活動効果実証された形となった。今後はさらに細かい検証をすることで、運動を苦手とする児童に対してどの程度の効果があったのか、児童に良い影響を与えた要因は何だったのかを調べ、次年度以降の研究につなげていきたい。

『中学校』

1 研究主題

一人ひとりの力を伸ばす体育学習
～各運動での「運動の楽しさ」について～

2 はじめに

昨年度まで、運動の中心のおもしろさについて研究を進めてきた。今年度は、運動が苦手な子も得意な子も楽しめる体育授業に着目して、研究を進めていくこととした。運動の中心のおもしろさに触れながら、生徒が思考を深めながら運動できる体育授業を今年度の研究テーマとした。

3 研究経過

4月に研究テーマを確認し、5月はベースボール型の体験を行った。6月は、ハードルやバレーボール、タグラグビーの取り組みを紹介、7月はキャッチバレーやタグラグビーの導入について体験をした。10月は、これまでの

研究経過を報告した。11、12月は、タグラグビーとハンドボールの体験を行った。

4 研究の概要

(1) タグラグビーについて

バドミントンコートを使用して、3人1組で行い、コーンの中に入れたら得点・入れられないようにタグを取るというゲームをした。小さいコートで何度も繰り返し行えることや人数を3人にすることで、満遍なく運動と思考の時間を確保できた。また、オフェンスとディフェンスがはっきりしており、チームによって攻め方守り方に正解がないので、全員が楽しく運動に取り組むことができるという意見があった。

ディフェンス側の3人の置く位置を前衛②後衛①の方がいいのではという意見が多く出た。オフェンス側では、「タグを取られる犠牲を出して、そのすきにコーンへ近づく」というおとり作戦や、「3人同時に攻める」という一斉攻撃という意見が出た。このように、オフェンスもディフェンスも自由な発想で思考し、何度も試合ができるので、運動が得意な子も苦手な子も積極的に取り組めるという意見が出た。

ルールや行い方が理解できて来たら本格的なラグビーに近づけていった。ボールをスマイルボールにして、コートバスケットボールにした。後ろにパスをするというルールを適用することから三角形を意識して、ボールをもらったら前に進み、後ろにパスを出す要領でまわりながら前に進む練習をした。また、タグをとられたら2歩でパスをしなければならないというルールで行った。

これらのことから、「ぶつかったりキャッチがしにくいということがなくなり安全に全員が取り組めていい」という意見が出た。

(2) キャッチバレーについて

バドミントンコートで3人1組で行わせることで、全員が満遍なく取り組めた。また、「返球以外はどこでもキャッチOK」「ボールをもつての移動はダメ」「ローテーションはしてもしなくてもどちらでもいい」という約束事することで全員が同じ土俵に立って思考することができた。

これらのことから、運動が苦手な生徒も「キャッチができることによって時間差攻撃やフェイントができる」という意見や「逆三角の形をとって、相手コートからのボールをまず誰かが拾って、それ以外の人間がセッターポジションに移動する時間が取れる」という作戦ができて良いと前向きな意見が出た。それ以外にも、「バレー経験者以外が意外と活躍できる」「キャッチがあるから空中で投げると速攻のようになる」という意見も出た。

5 今後の課題

これまでの発表を受けて、「技能の評価をする時はどうしたらよいか」や「道

具をそろえるのが難しい」など、新たな課題が生まれた。今後、これらの課題を解決していくとともに、実際の授業で取り入れ、生徒に還元していけるように、各学校の生徒の実態に合わせて、手を加え構成し直していく。